

經濟叢論 每月一日發行
 第四十七卷第六號昭和十三年十二月一日發行
 大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第四十七卷 第六號

昭和十三年十二月一日發行

論叢

幕末の出貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

投資節約の均等について……………文學博士 高田保馬

商品リンク制の發展……………經濟學博士 谷口吉彦

時論

日本銀行の國債引受と財政經濟……………深井英五

戰爭の意義と共同體的國內革新の急務……………經濟學博士 石川興二

研究

獨逸の植民問題……………法學士 前田稔靖

中小工業としての下請制工業……………經濟學士 田杉競

說苑

鉤屑錄……………法學博士 財部靜治

農業經營に於ける日支の異同……………經濟學士 菊田太郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第四十七卷總目錄

(禁轉載)

戦争の意義と共同體的國內革新の急務

石川 興 二

一

戦争なるものは國民的生命の巨大なる表現であるが、この巨大な表現を爲すことによつて國民的生命は變化する。かくて國民的生命の構造が戦争の構造を規定すると共に、この戦争がまた國民的生命の發展を規定する。この戦争と國民的生命との辯證法的關係は、現下の對支戦争行爲と日本の國民的生命との間にも存するのである。今尙ほ進展しつゝあるこの日支事變を最も意義あるものとして完成せしむることが現代日本國民の重任であるが、この爲めにもこの日支事變に於て存する辯證法的關係を明にすることが必要である。こゝには先づ戦争の構造を、これを表現するところの國民的生命の構造との關係に於て考察する。

二

抑も戦争なるものは、一の國家意志が、他の國家意志に對し、武力を用ゐることによつて、その目的を貫徹せんとするところの行爲である。この戦争には、その目的より見て、先づ二つの型が區別され得る。一は權力主義戦争であつて、他國の主權領土を併呑し以て自己の權力的支配圈を擴大することを目的とするものである。他は經濟主義戦争であつて、他國を殖民化することによつてこれを經濟的に搾取し以て自己の經濟的繁榮を計らんとす

ることを目的とするものである。戦争を爲すところの國家意志が、前者に於ては權力的支配の關心によつて動かされて居り、後者に於ては經濟的利益の關心によつて動かされて居る。その戦争の結果より見れば、前者は國際間の權力的支配關係を齎らし、後者は經濟的搾取關係を齎らす。故にこの何れの戦争の結果も、被壓迫國の反抗精神に於て、また一國の支配しつゝあるところのものを奪はんとする他の國家との間に於て、絶へず次の戦争の危険を包藏して居る。かくて諸列強は軍備に忙殺され、文明の齎らす生産力の増大も結局戦争の慘禍を増大せしむることとなる。かくて人類は自滅の道を進まざるを得ない。故に權力主義戦争並に經濟主義戦争は、人類の眞の發展の爲めには、結局廢棄されなければならないものである。こゝに第三の戦争の意義がある。それは、戦を無からしめんが爲めの戦である。戦を無からしむる爲めの戦は、戦の原因を除却し恒久的平和關係を齎らす戦でなければならぬ。即ち、この戦争は他國を自己の支權力的支配の下に置く爲めでもなく、また經濟的搾取關係に置く爲めでもなく、反對に相手國を第三國の權力的隸屬、經濟的搾取關係より解放して、その國家人格を完ふせしめその國家人格を尊重して自國との間に共同體的關係を確立し以て眞の平和狀態を打立てんが爲めの戦である。この共同體戦争の形式的特色は、戦争の相手が相手國の國民一般ではなく、その國を第三國の權力的隸屬並に經濟的搾取關係に置かんとする相手國の一部權力者又はこの第三國自體である。相手國の國民一般は、この權力者又は第三國より救濟せらるべきものである。即ち權力主義戦争は相手の國民全體を自國の支配の下に置くことを必要とし、經濟主義戦争は相手の國民全體を自國の經濟的搾取の下に置くことを必要とするのである。かくて權力主義戦争が權力的支配の關心が、この共同體戦争は相手國の國民全體を人間的に解放するのである。かくて權力主義戦争が權力的支配の關心

に基き、經濟主義戰爭が經濟的關心に基くに對し、共同體戰爭は人間尊重の立場に立つのである。

以上は戰爭の構造の類型であるが、次にこれを戰爭を爲す國家との關係に於て考察しよう。戰爭なるものは、當事國の多くの人命の犠牲を伴ふところの國家の大事である。故に一國民を戰爭に立たしむるが爲めには、國民を戰爭にまで動かすところの強い力がそこに働かなければならない。この力は、その國民的實在の構造の相違するによつて異なる。即ち少數の権力者が全體を支配するところの権力國家的國民に於ては、この力は少數の権力者の権力的支配の關心である。従つてそれは権力主義戰爭となる。また經濟的原理に立脚し有産者階級が無産者階級を搾取する市民社會的構造が支配して居る國民に於ては、この力は有産者階級の經濟的關心である。故にそれは所謂帝國主義戰爭となる。然るに人格的原理に立脚しそこに於て國民の總てが處を得て人間としての生活を爲してゐる國民共同體に於ては、この力は、國民全體の人格的共同體的關心である。このことは、人間の實在の構造の時代的相違についても、また國民的相違についても見られる。

先づこれを時代的に見るならば、そこに於て少數の権力者が全民衆を権力的に支配しつゝあつた中世の権力國家によつて爲された戰爭は、権力的支配の關心に基くところの権力主義戰爭であつた。これに對しそこに於て經濟價值が支配し有産者が無産者を搾取しつゝある近世の市民社會によつて爲された戰爭は、經濟的關心に基くところの帝國主義戰爭であつた。これを歴史上の事例について見れば、豊秀吉の朝鮮並に支那征伐は國內を平定支配せし彼が、進んで支那にまでその支配權を擴げんとせし権力的關心よりなされたものであつて、権力主義戰爭の意義を有する。また重商主義時代以來の西歐諸國の戰爭は、殆んど全く經濟的關心に基けるものとして帝國主

義戦争の意義を有する。即ち重商主義の戦争は、所謂帝國主義戦争であつて、白人諸國が有色人種の諸國を殖民地化する爲めに有色人種に對してのみならず、また白人相互が戦ふたのである。この重商主義的戦争の結果を最後にその手に收めた英國は、かくて市民社會的世界關係に於て有色人種を搾取するところの有産諸國民の首領となつたのである。この經濟的優位にある英國國民に對する新興獨逸國民の經濟的利害の矛盾が、歐洲大戰となつて現れたのである。

かくて中世の權力國家より近世の市民社會への發展によつて、戦争の意義は權力主義より經濟主義に移つたのであるが、今やこの市民社會より共同體への變革期に於て戦争の意味も、帝國主義戦争より共同體戦争なるものと轉換せざるを得ないのである。これ市民社會は自然科学の大なる發達とこれに基く生産力の著しき増大を齎したのであるが、その結果は人間生活を高める爲めによりもむしろ、戦争の爲めに最も多く用ゐられることゝなつた。これ帝國主義戦争の齎らせし現代の世界秩序が、常に戦争の危機を含んで居るが故である。即ち白人諸國の殖民地獲得は、相互の武力競争を齎らせるのみならず少數の強國が弱小國の搾取の上に生活して居るが故にこの壓迫者は常に武力を以てこれを壓迫して居ることを必要とし、更に強國相互は羊を分つ狼の争を繰りかへさざるを得ない。エチオピア問題、チエッコ問題等皆この意義を有する。而して一つの戦争は、次の戦争の危機を増大し、二國間の戦争は世界戦争を勃發せしむる危険を有する。かゝる状態を繼續するならば、文明は結局人間の自滅を將來するより外ないのである。人類がこの苦しき體驗を深めるにつれて、戦争自體を本質的に否定するの道を考へざるを得ない。而もそのことは、所謂持てる國と持たざる國とが、その持分の再分配を爲すことによ

つて達せらるべきものではない。それは要するに羊の分け前を争ふ狼の争に一時の解決を與へるのみであつて、狼同志の間に於ても狼と羊の間に於ても、戦争の危険は依然として繼續しまた爆發せざるを得ないのである。かくて今日の世界に於て、人間生活を高める爲めの根本的な道は、この止むなき戦争の土臺をなして居るところの市民社會的世界秩序自體を否定し、かくて諸國民相互がそれに於てはじめてその生活を安んじ、各々の個性を遺憾なく發揮し得るところの共同的地盤を確立するより外ないのである。これ即ち諸の國民がそれに於て生きるところの共同體である。この共同體を確立することによつて、人類ははじめて戦争の災禍より脱れて文明の齎らした一切を眞の人間生活の爲めに用ひ得るのである。現代の市民社會的秩序をかゝる共同體的秩序に變革すると云ふことが、現代人の人類史上に於ける劃期的な仕事であつて、こゝにはじめて、眞の人間歴史がはじまるのである。この事業は平和の手段に於て遂行することが最も願はしいのであるが、平和の手段によつてこれを遂行し得なければ、止むなく武力に訴へてもこれを爲さなければならぬ。これが即ち戦無き爲めの戦ひであり、人類共同體を實現する爲めの共同體戦争である。

人間的實在は、時代的性格を有するが故に、異なる時代的性格を有する人間的實在の表現としての戦争は、異なる時代的性格を有するのであるが、この人間的實在はまた異なる國民的性格を有する。故にその人間的實在の表現としての戦争はまた異なる國民的性格を有する。即ちその國の本體的構造が權力國家的なるものに於ては、權力的支配の關心が戦争の原動力となり従つてその國は權力主義戦争に於て秀れて居る。その國の本體的構造が市民社會的なるものに於ては經濟的關心が戦争の原動力となり従つてその國は帝國主義戦争に於て秀れて居る。

これが典型的な例は英國國民であつて、日没する處なき大英帝國はかくして建設されたのである。然るにその國の本體的構造が共同體的なるものに於ては、共同體的關心が戰爭の原動力となり従つてその國は共同體戰爭に於て秀れて居る。日本國民はその典型的な例である。

日本の國家の本體的構造即ち國體は「天皇を中心とする國民共同體」であつて、この共同體の一貫せる發展が日本國民史である。古代はその成立期であつて大化の改新に於て「天皇を中心とせる國民共同體」がはじめて成立した。中世並に近世はこの共同體の分化期であつて、中世に於てはこの共同體より權力國家的なるものが分化發展し、近世に於ては市民社會的なるものが分化發展した。かくて我國に於ては、この權力國家もまた市民社會も「天皇を中心とせる國民共同體」の分化發展せしものとしてこの共同體に於てあるものであつて、他國民に見られた如くこの共同體的構造を否定するものではなかつたのである。この日本が、更に發展すると云ふことは、それに於て市民社會的構造が支配的となれる現段階より、更に進んで共同體的構造自體が支配的なる段階へと進むことである。即ちそれは嘗て國民共同體より分化發展せし權力國家と市民社會とを止揚して國民共同體を確立することである。こゝに於ては、國家權力もまた諸文化社會も、「天皇を中心とする國民共同體」の機關としての共同體的精神に基いて働くのである。

かくの如く共同體的構造を以て國體とするところの日本國民のこれまで完ふし得た戰爭が、秀吉の朝鮮征伐の如き權力主義戰爭でもなく、また市民主義戰爭でもなく、只だ國民共同體戰爭のみであつたことは日本國民史上の事實である。日本人は大義名分の明な戰爭でなければ戦ひ得ないと云はれるが、この大義名分は、共同體的な

間的立場に立てる大義名分を意味するのである。即ち日本人は共同體戦争でなければ眞に戦ひ得ないのである。

この共同體戦争には、消極的な意味のものと、積極的な意味のものとがある。今日まで日本が完ふし得た戦争は、前者の意味に於けるものである。即ちそれは自己の國民共同體を防衛せんが爲めに全國民が共同體的感情によつて燃へ立つた戦争である。即ち日清、日露の戦争がこれである。日露戦争は露西亞の立場に於ては、殖民地獲得戦争であり、帝國主義戦争であつたが、日本の立場に於ては、露西亞の東亞侵略に對して「天皇を中心とする日本國民共同體」を防禦する爲めの共同體戦争であつた。従つてその戦争は、露西亞の國民全體に對しては、その生命を辱して戰場に向ふべき十分なる理由が明にされず従つて十分な國民的意氣が上らなかつたに對し、日本國民にとつてはその大義名分が極めて明瞭であつた。従つて國民は國を擧げて勇躍して戦に趣いたのである。その國力に於て非常な相違があり、またその兵備に於て遙に劣つて居たにも拘らず、日本をしてよく勝利を得しめたところのものは、國民全體が「天皇を中心とする國民共同體」に於て一致團結して居たからである。即ちこの國民的良心の自覺に基く人の和は一切の不利益を克服したのである。

共同體戦争には更に積極なるものがあり得る。それは、國際間の共同體的關係を實現せんとする戦争である。帝國主義的戦争が齎らしたところの市民社會的な國際秩序を打破して、新たな國際間の共同體的秩序を確立せんとする戦争である。市民社會戦争を最もよく遂行し得たものは、重商主義戦争に於ても、歐洲大戰に於ても、それ自身市民社會的な性格を最も豊に有する英國であつたが如く、この新しき時代の共同體戦争を最もよく遂行し得る國民はそれ自身共同體的な性格を最も豊に有する日本でなければならぬのである。かくて現代日本國民の爲す

べき戦争は、この積極的な共同體戦争より外あり得ないのである。

三

去る十一月三日に日支事變に關して爲されたる政府の聲明と首相によるその敷衍とは、今行はれつゝある日支事變の意義を、正にかくの如き積極的な共同體戦争として規定し、これを國民に自覺せしめ更に世界に表明したのである。この意味に於て、この聲明は劃期的な意義を有するものであると云ふことが出来る。

この聲明に於て先づ注意すべきことは、白人による東亞の殖民地化を明に否定せんとする事である。即ち近世の市民社會の成立期にはじまる白人の重商主義活動は、それまで人類文化の指導的地位にあつた亞細亞の諸國を次第に殖民地化して進んだが、極東日本に至つて遂にこの勢は反撥された。かくて日本は全亞細亞の白人による殖民地化を僅に防いだが更にこの殖民地化を露國に對し武力を以て防いだ。日露戦争によつて、白人に對する有色人種の自覺を強化した。而もこの日本は、白人諸國と對等的な只一の有色人種の國として、この白人諸國の殖民地化運動より亞細亞を救済する使命を有しながら、市民社會的原理が支配的である限りは、この國際間の市民社會的秩序に對し原理的に抗議をすることは出来なかつたのである。然るに今や東亞に關する限りこのことを原理的に聲明したのである。即ちそれは、今日歐米がその搾取階級としてこれを維持せんとする世界の殖民地的秩序の否定を、有色人種の政府の立場より最初に公然聲明したところのものである。この點に於て先づこの聲明は世界的な劃期的意義を有する。

然らば日本は、この市民社會的秩序を否定することによつて、如何なる秩序を齎らさんとするか。この點に於

ても、この聲明は重要な意義を有するのである。こゝに特に重んずべき云ひ表らばは、「齊しく東亞に相隣する日本と滿洲と支那との三國が各自の個性を存分に活かし、つゝ東亞保全の共同使命の下に固き結合をなすべき關係」と云へることである。即ちかくの如き關係は、一國が他國を支配する權力主義的關係でもなく、また一國が他國を經濟的に搾取する殖民地的關係でもない。それは、それに於て各自が保全せられ且つその個性を存分に活かし得るところの固き結合として、これ等國民を成員とするところの共同體的全體でなければならぬ。かくの如き共同體は、その各の國民が自己の生命の地盤としてこれを愛しこれを保護するところの共同體的全體であつて、この共同體に於てはじめて各國民は永遠に保全せられ、これに於て各自はその個性を存分に生かし得るところのものである。¹⁾

この東亞の再建設は、更に世界の再建設との關係に於て考へられて居る。即ち首相は世界の現状を批判し「過去の諸原則が事實上不均衡なる原則の維持を鐵則化し固定化するにあつたことは否むべくも」ないとなし、かくて「國際正義をして一個の美文たるに止まらしめず、通商、移民、資源、文化等の人間生活の各部門にわたりこれを綜合したる見地に立脚し現實に即應しつゝ歴史の發展に併行する新平和體制が創造せられねばならぬ」として居る。かくの如き世界秩序は、それに於て各國民が「各自の個性を存分に生かし」得るところの人類共同體でなければならぬ。²⁾ かくの如き人類共同體こそ歴史の發展に即するところの新平和體制である。それ故にまた東亞共同體を建設することは、この人類共同體的方向へ東亞を進展せしめ行くものとして、「世界の進運に寄與する所以」なのである。

- 1) こゝに特に協同體とせずして共同體とする所以を一言せんは前者は個々のもの間に成立するところの協力關係を意味するに對し、後者は各がそれに於て個性を存分に活かし得る共同體的土臺を意味するが故である。
- 2) 拙稿『現代變革期に於ける日本國民經濟學の義意』本誌第四十五卷第一號第五十四頁參照。

首相は更に「以上の諸條件を完備することが現下の一般的危機を克服する唯一の手段であることを確信する」として居るが、かくの如き共同體的立場は、同じく現代の市民社會的世界秩序の否定を呼びながら、ゲルマン民族の最優秀性を高調し、ゲルマン民族の世界征覇を以て、人類文化の爲めに最も願はしいことであるとするとヒッラーの全體主義的世界觀の立場とも異なる。¹⁾ また自由なる個人の自由なる聯帶としての人類社會を以て究極的理想となし、國民的個性を十分に尊重し得ない社會主義の世界觀の立場とも異なるのである。この全體主義の立場は結局中世の神聖ローマ帝國に於けるゲルマン民族の地位を憧憬するところの中世的復古主義であり、社會主義の立場は近世市民社會の個人主義的立場をその階級的差別を除きて徹底せるものである。これ等のものと異なるところの共同體的立場のみが、眞に現代世界史の指導的立場たり得るのである。

然らば如何にしてこの東亞共同體を實現し得るか。從來「帝國主義的野心に基く列強の角逐の犠牲となり、既にその平和と獨立とを脅威せられつゝありし」支那を援けて「獨立國家」たらしめ、この「東洋人としての自覺に目覺めたる支那國民と相携へて眞に安定せる東亞の天地を築く」ことであるとされたのである。

かくて「今次征戰の究極目的」は、この「日支兩國間に於けるこの理想の實現」を阻止しつある國民政府を打破し、以て東亞共同體を實現することであるとされたのである。こゝに今や日支事變は、正に積極的な共同體戰として規定されたのである。

更に首相は「眞に支那の民族的情熱を認識し支那の獨立國家としての完成を必要とすることにおいて日本ほど切實なものはない」と云ふてゐるが、支那を獨立國たらしめ東亞の共同體を現實すると云ふことは、日本自體の

1) Hitler, Mein Kampf.

運命にとつて缺く可らざることである。即ち若し支那がロシアや露西亞によつて共產化されまたは歐米人によつて殖民地化され行くならば、結局日本自體の存立をすら危くするのである。而も日本が歐米人に代つて支那を殖民地化せんとするならば、歐米人の支那殖民地化を反對する理由はなくなり、また支那をして歐米人に頼らしむるに至ることは、既に實驗されたところである。かくて日本は、この支那を獨立國家として重んじこれと相結んで東亞共同體としての新平和體制を實現する以外に自己の眞の發展を果げる道はない。かくて東亞共同體の實現は、日本がその發展を完ふせんとする以上、選擇を許さないところの必然的な事柄である。

かくて東亞共同體の實現と云ふことは、日本にとつて必要であるのみならず、更にそれは日本の國體に即せたる使命である。首相は「日本の消長發展が常に國體に對する自覺と相併行することは日本歴史が如實に證明するところである」と述べて居るが、このことによつて日本は人類世界の市民社會秩序より共同體的秩序への轉換期に於ける指導國民として、その國體に適切なる世界史的使命を果すこととなるのである。

四

この世界史的大業を完ふせんとする日本國民は、何よりも先づ自國の共同體的變革に努めねばならない。

これ曩に戦争の型と戦争主體との關係につき述べたところより明なるが如く、戦争主體たる日本自體がその國內に於ける市民社會的構造を速に共同體的に變革しなければその市民社會的構造が、戦争並に戦後の建設を帝國主義的に歪曲し、日支事變を通じて東亞共同體を實現せんとするこの聲明を結局「一個の美文たるに止まらしめ」ざるを得ないからである。

更に我國民は國外にこの聲明の惹起すべき白人諸國の壓迫を覺悟しなければならぬのであるが、これ等困難を克服してこの世界史的大業を完ふせんが爲めには、眞に國民全體の總力戰的努力持久戰的努力を必要とする。然るに常にその時代の發展傾向を著しく催進する戦争なるものは、資本主義制の末期に於ては、その階級的分裂性を加速度的に發展せしむる。例へば今や行はれつゝある經濟的統制は、これに著しく力を與へた。この階級的分裂力の働きをそのままにして、長期に亘る建設戰をなすと云ふことは全く不可能である。このことは既に歐洲戦争に於て事實として見られた。即ち、歐洲戦争に於てロシアも獨逸も外よりの敗北によつてではなく、内よりの階級的分裂によつて破れたのである。こゝに資本主義末期に於ける戦争の重大な危險性がある。ことに今日の戦争は防共と云ふことを重要な旗印として居るのであるが、共產主義を防ぐと云ふことは、單に武力戰の問題ではなく、むしろ下層民衆の生活問題である。即ち、この共產主義思想は下層民衆の生活の向上を高調する點に於て、氣流が高氣壓より低氣壓に流れるが如く、下層民衆が生活苦にあへぐところに入り來るのである。歐洲大戰に於て、それは先づロシア民衆の生活苦に點火されてロシアを内部的に分裂せしめ、更にロシアに對して戦争を誘ふ獨逸の民衆の生活苦にやがて點火され獨逸をして内部的に分裂せしめ、かくしてこの大戰を終了せしめたのである。勿論これ等の國に於けると異なり、我國體たる「天皇を中心とする國民共同體」は確乎不動である。而も市民社會の内部分裂性の増大が、この非常時に於て國民の眞の共同一致を妨げ國民の十分なる力の發揮を障害することは云ふまでもないのである。

かくて資本主義の末期に於て長期戰を繼續しなければならぬ我國は、先づ第一に市民社會秩序の本質として

の階級的分裂性を克服することに努力しなければならない。然らずんば長期建設戦をなすことは不可能である。この爲めには何よりも先づ市民社會制度の下に於ける無産者階級の人々に、生活の必需品を保證しなければならない。即ち眞面目に勤勞する人々にその一家の生活の必需品が與へられないと云ふ市民社會制度は、今や直に排棄されなければならないのである。而して生活の必需品と云ふことは、單に衣食住についての生活に絶対に必要なもののみならず、更に醫療と教育とを含む。即ち人間としては、身體の生活に必要なもののみならず、更に精神の生活なる教育が實質的に與へられなければならない。かくてこゝに國民共同體の實現が、速に著手さるべきである。

而も今日はこのことが、未だ出征兵士の家族、傷痍軍人の家族、戦死軍人の遺族の貧困なるものについてさえも十分に確立されて居ないのである。國家は一般民衆に對して、徴兵の義務を以て臨み、國家の爲めに身命を屠することを求めて居る。この要求は即ち國家が共同體の立場に於て爲し得る要求である。而も國家は、出征軍人の家族、傷痍軍人並にその家族、戦死軍人の遺族に對して、十分共同體的原理によつて報じて居ないのである。例へば、戦死者の遺族に對しても、千圓二千圓の金を與へてゐるが、かゝる金は貧困なる家庭に於ては、ことに徒費され、易くその妻子の眞の爲めになることは、少ないのである。むしろかゝる金を與へるよりも、國家は幼少なる遺兒の成長に必要な衣食住と醫療をこれに保證し、更にその能力に應じてその受け得る如何なる程度の教育に對しても、これを國家は當然の義務として受け得しめ以て一人前の人間たらしめなければならない。出征兵士が自己の死後その遺族が市民社會的に待遇され購買力がなければ生活の必需品も教育も受け得ないと云ふこ

を思ふことは、人情として忍び難いことである。これに反しその妻子が國家より共同體的に待遇されると云ふことは、彼にとつて如何に満足を與へるであらう。日本人は自己一身が死ぬとも、その子を通じて永久に生き得ることに満足するのである。日支事變は、これ等の人々に對して共同體的原理の發動を催進したのであるが、更に恩賜軍人援護會の事業としてこの原理の徹底せしめられんことを願ふて止まない。

かくて今次の變事の積極的意義を長期に亙つて實現し行く爲めには、こゝに日本の共同體的變革を着手すると云ふことが何よりも急務である。政府は自ら「必要なる國內諸般の改新を斷行」する旨を聲明し、首相は「新しき東亞の建設を擔當すべき日本は、その國民生活の全分野において新しき創造時代にはいつた」と述べて居るが國民は、大な國民的理想實現の第一歩として、先づこの國內改新の斷行に一致協力しなければならぬ。

五

かく日支事變を共同體戦争として完成することは日本國內の共同體的變革を急務とするのであるが、この國內の共同體的變革は、また日支事變によつて著しく準備されつゝあるのである。即ち、既に述べた如く戦争なるものは、國民的生命の巨大なる表現であるが、この巨大な表現の事實は、それ自身として國民的生命に働きかけて、その國民的生命の發展に時期を劃するものである。これは何れの國民についても見られるところであるが、これを我國の市民社會的段階について見れば、日清戦争を以て資本主義の成立期が、日露戦争を以て發展期が、世界大戰への参加を以てその爛熟期が、はじまつた。而して昭和六年の滿洲事變以來はじまつた日支事變は、資本主義末期に於ける戦争として、市民社會的秩序を否定すると共に來るべき共同體的秩序を準備しつゝあるのである。

かく準備されて居るところのものを更に發展せしむるならば、こゝに日本國民共同體が實現されることとなるのである。

日本國民共同體實現の爲めには、その實踐の四要因が準備されなければならないのであるが、先づこの共同體の實現が何の爲めになされるか、國民に明に自覺せられなければならない。この日本國民共同體實現の究極目的又は目的因が明にされることによつて、國民がこの實踐に一致協力して當たることが出來るのである。このことは、廣東漢口の陥落と共に日支事變の意義を内外に表明しなければならなかつたところの十一月三日の聲明とその敷衍によつて國民全體にはじめて明確に示めされた。即ち日本は東亞共同體を建設し世界の進運に貢獻する爲めに、「國內諸般の改新を斷行」しなければならぬのである。かくて我國民は「上下一致固き信念と決意とをもつて内外の整備建設に邁進しなければならぬ」のである。

次に國民共同體の實現の爲めには、それによつてこの實現が押し進められて居るところの根柢的な原動力が働いて居なければならぬ。これ國民共同體實現の爲めの動力因の最も根柢的なものである。日支事變の進展が軍人の遺家族に對し衣食住・醫療・教育を、國家が共同體的義務として與へることを必要ならしめて居ること、また國民の貧困階級に對してもこれを實行することを必要ならしめて居ると云ふことに於て、この動力因の最も根柢的なものが見られるのである。日本の國民共同體の根本精神は天下一人も處を得ざるものなからしむることにある。この精神が徹底的に實現された時日本國民共同體が具體的に實現される。この實現の過程は日本歴史の進行と共に推し進められた。先づ古代に於ては貴族階級が、中世に於ては武士階級が、近世に於ては市民階級

が、水に投ぜられたる石の波紋の擴がるが如く、順次自らを人間の生活に高めたのである。最後に今尙ほ生活の必需品にも窮する有様にある國民大衆が自らを人間生活に高める時、こゝに國民共同體が具現されるのである。日支事件の進展は、生命的にまた經濟的に最大の犠牲を擔ひつゝあるこれ等の人々の日本國民共同體の成員としての當然な要求をこれ以上ながく、無視して置くことを許さないものである。

國民共同體の實現には、それから、共同體が實現せらるべきところの素材が準備されなければならない。この素材因には、人的なるものと物的なるものがある。先づ人的なるものについて考察しよう。

國民共同體の人的要素は、先づ國民的な共同感情に結ばれたところの國民全體である。即ち國民共同體なるものは、この國民全體の共同感情の上に基礎付けられて居るのである。こゝに國民共同體の第一の特徴があるのであつて、これが權力國家ともまた市民社會とも異なる所以である。戰爭なるものは國に對する國民の共同行爲として國民の共同感情を強化する傾向を有する。これ古來の政治家が國民感情の統一の爲めに對外戰爭を利用せし所以である。然しながら既に市民社會的の制度の下に於て出來上つて仕舞ふた人々を人的要素として共同體を十分に實現すると云ふことは結局不可能である。即ち、これ等の人々の間に存する不平等を、徹底的に共同體的に改めると云ふことは不可能である。故に共同體的原理の具體的實現は、これを次の時代に成人たるべき人々に期待しなければならぬのである。

扱てこの次の時代に於て成人たるべき人々を共同體の人的素材たらしめんが爲めには、これ等の人々に、今日の市民社會的教育と異なるところの共同體的教育を與へなければならぬ。このことは單に教育の内容について

のみならず、教育を與へる制度についてもである。即ち中世の封建社會に於ては、高き教育は殆んど權力者階級に獨占せられた。明治維新になつては、かくの如き教育の不平等は打破された。而もそれは形式上の不平等が打破せられ、形式上の平等が齎らされたのであつた。然しそこには尙ほ教育の實質的不平等があつた。即ち市民社會に於ては教育までが商品化されて居て人々はその才能に應じて教育を受け得るのではなく、その財力に應じて受け得るのである。これ即ち市民社會的教育制度である。これを改めて共同體的教育制となすことは、人々の支配し得る財力の如何に拘らず、人々の能力次第にこれを啓發すると云ふことである。即ち高き學校に入り得る能力を有し而も必要な財力を有せざるものに對しては國家が義務としてその費用を負擔する。反對に如何に資力を有するも高き能力なきものは高き學校に入れないのである。かゝる共同體的教育制度によつてはじめて國民の人間的能力が全面的に啓發され得るのである。この教育の實質的機會等制度は、さきに軍人の遺家族に先づ適用さるべきであるとせしところのものを全國民に擴充したものである。この制度の下に於ては最高な學府に學ぶと云ふことは、國民全體の中に於て最高な能力を有すると云ふことである。かくの如き共同體的精神によつて教育されたる人々にしてはじめて具體的な共同體を實現し得るのである。またかくて來るべき時代に於ては文化のあらゆる分野に於て、今日よりも遙に秀てたるまた多數なる人材が輩出し、國民のあらゆる文化域の著しき發展を齎し、その國民社會全體の精神的物質的生産力は著しく高まらざるを得ない。かくて教育の實質的機會均等に要すべき費用は一代にして償ふて餘りあるのである。蓋しこの全國民の人的富源の開發に投ぜられる費用程生産的な投資はないと云ふことが出来るであらう。勿論人間の教育はそれ自身目的であつて、この點に於

て經濟的投資とその意味を異にする。

この教育の實質的機会均等と云ふことは、次の時代に於ける國民共同體の具體的實現を準備するのみならず、更に現代の國民の間に共同體的精神を旺ならしむることとなるのである。即ち既に成人せる人々の間には社會的な不平等があるが、而も自己の子供があくまで公平にその能力次第に共同體的教育を受け得ると云ふことは、この人々をして、現代の不公平に對する不平を意とせざるに至らしむるのである。ことに家族的共同體感情の強き日本人にとつては子供の生命はまた自己の生命なのである。

國民共同體の實現の爲めには、更に物的要素が大いに必要である。従つてこれ等物的要素を生産する爲めの生産力の大増加が必要であるが、日支事變はこれをも準備しつゝある。即ち戦争の準備行爲は、この國に於ける重工業の發達を前提條件とするが、戦争の進行はこの重工業を急速度に發達せしめつゝあるのである。この重工業は、將來の國民共同體に於ける物的生産力の基礎となるのである。然しこの爲めには更にこれ等重工業が、市民社會の私有私用の制度より、少くとも私有國用の制度に移されなければならないのであるが、此戦争はまたこれをも準備しつゝある。總動員法案の發動等は即ちこれである。

然し私有私用の制度より私有國用の制度へ、重工業その他の資本主義企業を移すと云ふことは、そこに資本主義企業の原動力であるところの利潤追求の自由を制限することとなる。而もこの自由を原理的に保持することは國民共同體の「人の和」を傷けることとなる。こゝに共同體の物的要素と人的要素との間の矛盾が存する。このことは、總動員法案第十一條の發動問題に於て最もよく象徴された。然し戦争に對しても共同體の實現に對しても

最も重要なものは結局「人の和」である。故に共同體の人的要素の立場より利潤追求の自由を原則として否定されなければならない。然らずんば大なる生命的並に經濟的犠牲を負擔しつゝある國民大衆が資本家階級に對し強く反感を有することとなり、國民の一體としての共同體的感情は、階級對立的感情によつて破壊されることとなる。而もまた生産力の發展は、この國民共同體の確立の爲めに必要なのである。故に生産力の必要な増大が、尙ほ資本家階級の活動を必要とする限りに於ては、利潤追求の自由を或程度に於て、國民共同體實現の立場より、例外的に許るさなければならぬ。

次に國民共同體の變革がそれを實現すべき形相¹⁾をも日支事變は、強化しつゝある。即ち先づ國民共同體にはそれに於て諸種の小共同體が存立し以て、全共同體の働を十分ならしめることを要するのであるが、この重層的構造も強化されつゝある。例へば今や國家による經濟統制は諸種の産業組合制度を強化することによつて行はれつゝあるが、これ等強化されたる組合制度は、將來の國民共同體の經濟組織の内容をなすべき諸の共同體の基礎をなすものである。同様のことは、銃後應援等の爲めに強化され創造されつゝあるところの全國民範圍に及ぶ諸種の細胞的組織についても云はれ得る。次に、我國民の心事に於ては、天皇の爲めに戦ひ天皇の爲めに死するのであるが故に、日支事變の進行は、天皇と人民との間に介在する一切を排除し益々その結びを直接化しつゝある。かくて我國民共同體の本質たる「天皇を中心とする國民共同體」の構造を強化しつゝある。更に以上述べ來たりしところよりも明なるが如く、日支事變の進行は、今や市民主義の立場と共に權力主義の立場を克服し、その一切を國民共同體的精神によつて支配せんとしつゝある。故に國民共同體の基礎性が徹底せられかくて「天皇を中

1) 2) 前掲拙稿『日本國民經濟の根本性格』第二十三頁參照

心とせる國民共同體」が一切の基礎原理として確立されつゝあるのである。

六

日本の國民共同體的變革の公的聲明は既に明治維新に於てなされたのである。明治天皇は、『維新の詔』に於て「君臣相親しみ上下相愛」することを以て我國の本質とせられ、この「億兆の父母」と「赤子」の關係を妨げるところの封建的構造を否定せんとせられ、「天下億兆一人も其處を得ざる」ものなからしめることを國民共同體的變革の根本原理として確立し給ひ、更に『五箇條の御誓文』に於てこの實現の爲めの方策を定め給ふたのである。¹⁾その後七十年は、この國民共同體實現の準備期であつた。今や日支事變は、日本國民共同體の實現を決定的に必要なすると共にまた決定的に準備しつゝあるのである。かく久しきに互つて準備され來つたところのもの以て、速に「天皇を中心とする國民共同體」を確立し、かくて國民的總力を發揮し、日支事變を共同體戰として完成し、天下一人も其處を得ざるものなからしめんとする共同體的大精神によつて東亞共同體を確立し、以て人類世界の進展に貢獻するこそ、現代日本國民の世界史的使命である。

1) 拙稿『維新の詔に於ける變革の國是』本誌第四十四卷第五號參照